

# 日常実践としての社会化の「達成」

## —ある学校的社会化の事例から—

森一平（東京大学大学院）

### 1. 本報告の目的

本報告では、社会化現象において／として、わたしたちが実際に行っていること／行いうることの実相に迫り、社会化についての記述を、経験的により妥当なものに書き換えることを狙う。

社会化についての伝統的な記述は、そのほとんどが内面化論的な構成をとっている。すなわち社会化とは、言語、社会的知識、役割志向など、行為を適切なものにするための、ないしはそもそも、行為を行為として構造化するための、制約ないし方向づけの様式（以下、規範とする）を、心／身体が獲得する過程であるとされてきたのである。

例えば Parsons (1951=1974) は、「学習」をパーソナリティのメカニズムと述べた後で (p. 207)、社会化を、役割志向を習得する「学習の特殊な一部分である」(p. 209) と定義している。

しかし、こうした内面化論的な記述は、「社会化とは規範の内面化である」という単純な命題を通行手形にし、社会化を行う際にわたしたちが従事している作業や、その際に用いている／用いうる道具立ての存在を——それらが内面化論的な記述の決定的なリソースになっているにも関わらず——、一足飛びに飛び越え、見ずに済ませてしまう。なるほど確かに、こうした身振りは、論者が構築する社会理論の体系に社会化の記述を位置づけることだけが目的である場合には問題にならない。しかし、社会化について、なるべく経験的に妥当する記述を目指すという本報告の狙いにとっては、こうした身振りは大いに問題がある。

わたしたちは、経験的妥当性の高い記述を行うために、社会化の作業やそのための道具立ての存在を、まずはつぶさに見ていく必要がある。本報告ではまず、社会化について、その「過程」と「達成」が区別可能であることを示し、特に「達成」の場面に焦点を当てて、記述の作業を行う。さらにそのあとで、その「達成」に対応するものとして帰属可能な社会化「過程」についての記述も行い、両者の関係性のあり方が、内面化論的な記述にどのように関わっているのかについて論じる。

本報告ではこの作業を、幼稚園3歳児クラスにおける出欠確認作業の開始場面の相互行為データを用いて行う。その場面で園児たちは、「両手を後

ろにやる」ことをしながら座るといふ振る舞いに向けて社会化されていると記述可能であり、またその社会化を「達成」していると帰属可能であった。この事例は、教室において先生主導で行われる作業において「きちんと座る」という「学校的」振る舞いへの、「学校的」社会化の事例でもある。

### 2. 社会化の「達成」の帰属可能性

社会化の「達成」について記述を行うに当たって、まず注意しておかなければならないのは次のことである。社会化の「達成」は、「何かができるようになる」という可能化の事態の表現に対応するが、こうした表現は、何らかの行為や出来事に対応するような種類のものではないということである。可能化とは「できない状態」から「できる状態」への飛躍であって、そこに時間的な幅は存在しないが、行為や出来事には必ず時間的な幅が存在する。すなわち、行為や出来事は時空間に位置づくが、社会化の「達成」は時空間に位置づかないがゆえに、両者の対応関係は問題にしないのである。

一方でわたしたちは、可能化の「瞬間」がいつであったかについても問題にしない。ある行為ができたとき、その行為を行った瞬間にできるようになったのか、既にそれ以前にできるようになっていたのか、わたしたちは決定することができないからだ。この点からも、社会化の「達成」は時空間に位置づかないことは明らかである。社会化の「達成」とは何よりも、わたしたちが諸々の条件をリソースにして、誰かに帰属する記述なのである。わたしたちは、社会化の「達成」を問題にするときに、学習について論じた西阪 (2008) が言うように、その帰属を行うことを可能にしていく条件をこそ問わなければならない。

本報告の事例において、社会化の「達成」を帰属できることの条件となっていたのは、園児たちが、「出欠確認作業において両手を後ろにやる」という規範的な振る舞いを、先生による具体的な教示なしに、「自律的」に行うことができていたということ、そして、園児たちによるその「自律的」な振る舞いに対して、先生による「評価」が返されていたことである。このことの詳細について

ては実際の報告で論じる。

### 3. 社会化過程の記述可能性

社会化の「過程」について問題になるのは、それがいかんにして「社会化」過程として記述可能であるかということである。例として「子供たちが砂場遊びをすることで、彼らは相手を思いやることができるようになった」という命題について考えてみよう。この場合、「砂場遊び」が社会化「過程」として記述可能であり、「相手を思いやることのできるようになった」ことを社会化の「達成」と言いうるだろう。ここで問題になるのは、後者の「達成」なしに、単独で「砂場遊び」を観察した場合、それを「社会化」過程として言い当てられないということである。「砂場遊び」を単独で観察しただけでは、そこで「何が」社会化されているのかを決定することは、非常に困難であるからだ。この問題には、社会化過程を記述する際の条件が端的に表れている。すなわち、社会化の「達成」が先にあって初めて、そこに至る社会化「過程」が事後的に記述可能になるということである。ただし、必ずしも事実としての「達成」が先にある必要はない。社会化の「達成」像が、規範的な予期にとどまる場合であってもかまわない。この場合、ある相互行為過程はそれ単独で、「社会化過程」として記述可能になる。例えば、「信号待ちの指導」の相互行為過程は、それ単独で、子供を信号待ちできる主体に社会化する過程として記述できる（社会化過程の記述における教示作業の優越性）。従って、ある相互行為過程を「社会化」過程として記述するための条件とは、事実的にであれ規範的にであれ、社会化の「達成」が先に指定されているということなのである（社会化における「達成」の優先性）。

さて、本報告が社会化過程として記述するのは、先にその社会化の「達成」が帰属可能であった、「出欠確認作業において両手を後ろにやる」という規範的な振る舞いが、先生によって具体的に教示されることで、「他律的」に遂行されている場面である。その場面ではまず、「今日は誰がお休みなのか」という、出欠確認作業の状況にレリバンタなトピックについてのやり取りが行われる。その後で、そのやり取りの中に現出していた「お休みのお友達」カテゴリーと対比させる形で、今まさに教室に存在している園児たちを「元気に来たお友達」カテゴリーを用いて名指すことで、そのカテゴリーと結びついた活動である「元気よくお返事する」ことが指示される。そこで指示されている「元気よくお返事する」ことの内容は、相互行為が展開していく中で、先生の発話により具

体化されていく。まず、「元気よくお返事する」とは「いいお声でお返事する」ことであることが示される。続いて、「いいお声でお返事する」ためには、「お手々を後ろにする」ことが条件であることが、if-then 構文として組織化された発話において示される。こうした一連の相互行為の流れの中で、出欠確認作業においては、「両手を後ろにやる」ことが適切な振る舞いであることが、先生によって教示されるに至るのである。

園児たちは、先生によるそうした教示に応答するように、「両手を後ろにやる」ことをしているのだが、その振る舞いは、まさに先生による教示が介在していたことによって、「他律的」に遂行された、社会化の「達成」以前の、社会化「過程」として記述可能なのである。

### 4. 社会化の「過程」 - 「達成」と内面化論

最後に考えてみたいのは、わたしたちが、「出欠確認作業においては両手を後ろにやる」という振る舞いへの社会化過程を探し当て、それとして記述できたことについてである。わたしたちは、当の振る舞いへの社会化が達成されたことを帰属可能な場面について事前に記述していた。それによって、「出欠確認作業においては両手を後ろにやる」という知識の共通性をリソースにし、社会化の「達成」場面から遡及的に、そこへの社会化「過程」を探り当てることができていたように思われる。重要なのは、その「過程」によって社会化が「達成」されたのかどうかは決定不能であるということである。当の振る舞いができるようになったことについて、別の過程が効いていたと論ずることはいくらでもできるからだ。社会化の「達成」を元手にして、社会化「過程」を探索することは、ここでもまた、わたしたちの帰属の問題なのである。その背後には、何らかの「達成」が生じるときには、その「過程」が問題になるという、概念上の結びつきがあるように思われる。

内面化論は、この概念上の結びつきをリソースにして、あくまで遇有的な帰属関係に過ぎない社会化における「達成」と「過程」の関係性を、「内面における蓄積」を掛け金にして、必然的な関係性へと転化することで初めて可能になる記述なのではないだろうか。

#### 【文献】

- 西阪仰, 2008, 『分散する身体——エスノメソドロジー的相互行為分析の展開』 勁草書房。  
Parsons, T. 1951, *The Social System*, The Free Press, (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』 青木書店.)